

M 情報

2010年1月、3月のマネジメント情報で、マイコプラズマ性乳房炎について詳しく紹介されました。当社では3月にCO2培養機を導入し、マイコプラズマの培養を行えるようになりました。既に検査を開始しています。要望に応じてバルク乳のスクリーニング、導入牛の乳汁検査、臨床型乳房炎検査を実施し、マイコプラズマ感染牛を早期に発見し対応できる体制を作り上げたいと考えております。

マイコプラズマ性乳房炎

- ・マイコプラズマ性乳房炎は伝染性乳房炎である。
- ・通常の細菌培養で検出できない。
- ・検査(培養)に時間がかかる。
- ・無症状保菌牛(乳房の腫脹や凝固物がない)が存在し感染源となり、発症牛は多量の菌を排出する。
- ・伝染力が強く、集団発生をひきおこす可能性がある。
- ・抗生剤による治療効果が極めて低い。
- ・乳房感染が泌乳期、乾乳期いずれのステージでも起こりうる。

以上のことから発見が遅れて牛群内に蔓延する危険があります。定期的なバルク乳スクリーニングは早期発見、早期対応に有効であると考えております。

定期的なバルク乳培養

1度の検査で牛群内にマイコプラズマが陰性であるとは言い切れません。検査時に未経産牛あるいは乾乳牛、ホスピタルペンの牛、感染後数週間の排菌数の少ない牛またバルクタンクでの希釈により検出されない場合があります。ですから、定期的な検査をお勧めします(例えば1ヶ月に1度)。

導入牛の合乳培養

農場内へのマイコプラズマの侵入に関して、導入牛には注意が必要です。導入牛の乳汁検査も積極的に実施し、侵入被害を最小限にする。

根室家畜保健所における発生状況

病勢鑑定の結果によりマイコプラズマ陽性となった戸数と発生頭数
(菌種は不明)

